
レイン

夏目柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイン

【Zコード】

N8383M

【作者名】

夏目柚

【あらすじ】

季節は5月、ヒロイン「扇田 美香」は、主人公「天竜寺 行」と雨の日に出会つたしました。それは、あつてはいけない一人の出会いであつた。行はある力を宿す霊媒師、美香は普通の高校生(?)。行にかかわつてしまつたばかりに宿つてしまつた力。

そんな二人が送る、ハラハラドキドキの学園物語。

その日も雨が降つていた。

出会い

雨はその日も降っていた。

私は教室に忘れ物を取りに、部活帰りに教室によつた。友達は「一緒にいこうか?」と、言つてくれたが私は「大丈夫だよ」といい、一人で来た。

現在7時を回り、あたりは真っ暗だった。

雨の滴る音が学校に広がる。自分の足音もはつきりと聞こえてきみが悪かった。今思えば、やっぱり友達についてきてもらえればよかったな、なんて思う。それほどにも、夜の学校とは怖いものなのだ。だけど、私は特に靈感などはないので別に「なんかい」よりはただの「怖い」だ。

教室の前に着くと中からガタンッと音が聞こえた。

私はビクッとびくらせた。

「だ、誰かいいるの?」

恐る恐る、ドアのノブに手をかける。手が震えて、足も震えているのがわかつた。

ゆっくりとドアを開けると…。

「あれ?」

一番後ろの窓側に人が、顔を机に向つぶせにしていた。

「ひつ!」

私は一步後ろに下がると、寝息が聞こえてきた。

「あ、あれ? ……え、寝てる?」

すぐに、幽霊じやなく人と分かつた。私はほつと肩を落として近寄つてみると、綺麗なブロンドの髪の隙間からみえる長いまつげの目。私は、そつと髪に触れた。

「…………んつ?」

「あ」

彼は起きてしまったのか少し声を漏らした。

「あ、あの？」

「あ～っと…今何時？」

かすれた声が整った唇からかすかに聞こえた。私は携帯をすぐに出し時間を読み上げた。

「7時16分です」

「あ！」

彼は何かを思い出すように椅子から立ち上がった。
結構な美形だ。彼の前髪は伏せてたせい立つていて、そこがかわいらしくて私は笑ってしまった。

「な、何がおかしんや？」

「寝ぐせ」

私が手を伸ばし髪に触ると彼は「あ～すまんが、直してくれ」と、椅子に座りなおした。

意外と素直なところとか、変な関西弁が少し気になるけど、そんなところがかわいらしくて、私はいつのまにか夜の恐怖を忘れていた。

「お前、なんでこんなところにいるんだ？」

「えっと、忘れ物…」

「せな、速く忘れものをとつて、おうちにかいりい」

少し眠そうに眼をこする彼。

「あ、はい。寝ぐせなおりませんよ？」

「頑固やなー」

私が寝ぐせをもつっていたクシでとかしていると、雨がどんどんと増していく。

「お前はん、大事か？　こんなに雨が降つてあるで？」

「そうですね。大変ですね。帰るの」

「お前、のーてんきやなあ」

「よく言われます。だけど、雨結構好きだし。大丈夫です」

「おうちの方も心配してはるんじや…………」

その時だ、光の筋が真っ暗な空に映つた。数秒後に雷が落ちた。

「近いですね」

私はくしをポケットにしまつ。

「なおりましたよ。寝ぐせ」

私は彼にそういった。

「来るな…」

「え？」

彼は立ちあがつた。

その日は雨がやまなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8383m/>

レイン

2010年10月10日21時52分発行